

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 9

賀古・印南郡の古代寺院

一加古川下流域の古代寺院を歩く一

寺岡 洋

はじめに 加古川流域の古代寺院 20弱

加古川中流域(賀毛郡)の古代寺院を紹介したので、下流域に移ります。左岸(東岸)が賀古郡(かこのこほり)、右岸が印南郡(いなみのこほり)。『播磨国風土記』での賀古郡の里は、望理(まがり)、鴨波(あわは)、長田(ながた)、駅家(うまや)の4里。印南郡も、大国(おおくに)、六継(むつき)、益氣(やけ)、含芸(かむき)の4里。現在知られている古代寺院跡は賀古郡3ヶ所、印南郡2ヶ所、合わせて5ヶ所あり、下流域も中流域の賀毛郡(12里、9ヶ所)に劣らず古代寺院が集中する。ちなみに、上流域の託賀郡(たかのこほり)には4ヶ所あり、加古川流域全体では18ヶ所(+α)もの古代寺院跡が残る。

寺院の造立集団・知識リスト

まず、『播磨国風土記』に登場する人物等の紹介から始めます。賀古郡の冒頭部分に、

- ・印南別嬢(いなみのわけいらつめ) 母親は吉備比売。景行天皇の皇后。『古事記』では、吉備臣等の祖の女(むすめ)とあり、いずれにしても吉備の豪族が加古川下流域に勢力を扶植している。

- ・息長命(おきながのみこと)、一名(またのな)伊志治(いじじ) この人物は、「賀毛郡の山直(やまのあたえ)等が始祖(とおつおや)」であり、「墓は賀古駅家(うまや)の西」にある。始祖の墓があるということは、本来は加古川河口に本拠があったのであろう。

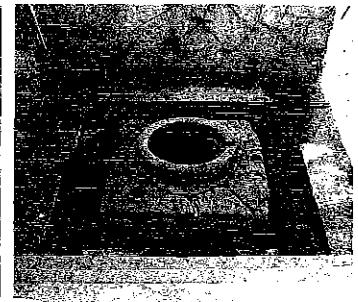
- ・楫取(かじとり) 伊志治(大中(おおなかの)伊志治) 楫取は船頭。この人物は山直の始祖と名前(伊志治)が同じなので、同一人物かもしれない。楫取であれば鹿子水門(かこのみなど)の近くに墓があるのはぴったりである。

- ・須受武良首(すずむらのおびと) 告首(つけのおびと)とも。須受武良、告首ともに不詳。

- ・出雲臣比須良比売(いづものおみひすらひめ) 出雲出自の氏族も加古川流域に居住している。



中西廃寺 塔心礎



石造露盤(ろばん)と刹(さつ)

望理里 大蒂日子命(景行天皇)のみ 西条廃寺、行者塚古墳や西条古墳群(60基)が所在する。

鴨波里 大部造(おおとものみやつこ)等が始祖古理壳(こりめ) 大部造は任那(みまな)出自。『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』に、「任那國主、龍主王の孫、佐利王自(よ)り出づ、佐利王は、任那国人左李金(亦名 佐利己牟)」とある。

鴨波里は古理壳が、「この野を耕して、多(さわ)に粟を種(ま)きき。故(かれ)、粟々(あわは)の里という」という開拓伝承をもつ。水田ではなく粟(畑作)であることも印南野台地の地形によく適っている。里の比定は難しいが、石守廃寺が所在する。

長田里 大蒂日子命(景行天皇)のみ。

駅家里 人名なし。駅家の北に野口廃寺あり。
印南郡(いなみのこほり)

大国里 石作連大来(いしつくりのむらじおおく) 龍山石(たつやまいし)の産地。石の宝殿(生石(おうしこ)神社)がこの里に残る。

六継里 大蒂日子が新婚生活を送った村の由。

益氣里 人名は記されないが、「御宅(みやけ)、宅(やけ)の村」があり、ミヤケ推定地。渡来系集団の群集墳とされる池尻古墳群(54基)がある。

含芸里 他田熊千(おさだのくまち) 「私部弓取(きさきべのゆみとり)等が遠祖(とおつおや)」とある。他田(訛語田)氏は大和巻向(桜井市太田)からの移住であろう。太田はミヤケ関連地名で、飫磨郡大田里の吳勝(くれのすぐり)の話がよく知られる。

丸部臣(わにべののみ)等が始祖比古汝茅(ひこなむち)と、吉備比古・吉備比売・印南別嬢が登場。

以上を列記すれば、印南別嬢、息長命(伊志治)、山直、楫取伊志治(大中伊志治)、須受武良首(告首)、出雲臣比須良比賣、大部造・古理壳、石作連大来、私部弓取・他田熊千・丸部臣・比古汝茅、吉備比古・吉備比賣などが登場する。寺院の数に較べて壇越(だんおつ)・「知識」候補の数が少ない。

文献・木簡資料等の人名

・馬養造（うまかいのみやつご）人上（改姓して印南野臣に）。播磨國賀古郡の人、外從七位下。

人上の先祖で、吉備都彦の苗裔である上道臣（かみつみちのおみ）息長借鎌の六世の孫になる牟射志（むさし）が上宮太子の馬司に任じられ、庚午年籍（こうごねんじゅく 670年）の際に誤って馬養造に編された、と上申し改姓が承認された（『続日本紀』天平神護元年（765）条）。吉備の上道臣、上宮太子（聖徳太子）・上宮王家、法隆寺の関係がうかがえる。さらに、この繋がりの中に山直が関わる。

・出雲臣人麿 水児船瀬（かこの心なせ）に稻を献じ、末端の官位から地方での最高位に上昇した人物。郡名が分からぬが、上記の出雲臣比須良比売とも同族であろう。水児船瀬は、鹿子水門（かこのみなど）とも呼ばれ加古川河口にあった港。（「授播磨国人大初位下 出雲臣人麿 外從五位下 以獻稻於水児船瀬也」『続日本紀』延暦十年（791）条）。

・浦田臣山人 時代が平安時代初まで下る。連れの二人はエミシ（蝦夷）の首長であろう（「播磨國印南郡權少領外從五位下浦田臣山人等三人、特聴節会入京」「夷外從五位上宇漢米公色男、外從五位下々散南公独伎、『日本後紀』弘仁三年（812）。

ここで挙げた、馬養造、出雲臣、浦田臣などは古代寺院建立の有力な「知識」候補になる。

木簡（「奈文研」）名前の分かるのは二名のみ。

曾弥部石村 賀古郡淡葉郷須口（保か）里

戸戸首名儀 加古郡禾々里 口は不明

刻畫土器 「山直川縕」 9世紀代の志方古窯跡群（加古川市）出土。「金」「良文世」などもある。

西条廃寺（県史跡 加古川市西条山手）

加古川バイパス加古川東ランプ（JR東加古川駅すぐ北）で下り、県道383号線を北上する。3kmぐらい走ると左手（西）に道路と化した石守（いしもり）廃寺跡がある。右手に見える丘陵に史跡公園化された西条廃寺、やはり史跡公園として整備された行者塚古墳・人塚古墳など西条古墳群が立地する。西条廃寺は瓦積基壇の塔跡、金堂跡が復原され、中門・講堂などもそれぞれ整備されている。昨年3月末に出かけた時、ちょうど人塚古墳の周濠に造られた瓦窯跡を埋め戻し作業中で、残念だった。

・『西条廃寺』加古川市教育委員会 1984年



・『よみがえる伽藍—西条廃寺と播磨の古代寺院』

加古川総合文化センター 1994年

・『加古川市史』第四巻 資料編 I 1996年

推定寺域は削平がはなはだしいが、規模はおおよそ東西約90m、南北約70mと想定されている。南辺では中門に取り付く柵列が、北辺でも推定講堂に取り付く柵列が検出され、回廊の代わりに木柵を巡らすのが特異だ。ただ、上宮王家と関連する斑鳩中宮寺も掘立柱塗である（「史跡中宮寺跡（第13次）発掘調査 現地説明会資料」斑鳩町教育委員会 2010.2.21）。寺の西側には人塚古墳が存在し、周濠に接して築地状の遺構が調査されている。

伽藍配置は東に金堂、西に塔、北に講堂を配した法隆寺式の範疇になるが、金堂は南面せず西向きに建てられる。塔と金堂の間がはなはだしく接近している。塔・金堂基壇は、渡来系寺院に多用される瓦積化粧基壇であることに注目される。中門は礎石が見られず、掘立柱というのも珍しい。

出土した軒丸瓦は8種、軒平瓦は6種。播磨國府系瓦（毘沙門式）が下限。遺物では銅製の風鐸、相輪、水煙（すいえん）などがあり、加古川総合文化センター（JR東加古川駅の北）で展示されている。

西条廃寺は7世紀末に創建され、9世紀まで続いたと考えられている。

石守（いしもり）廃寺（加古川市神野町石守）

西条廃寺から南西約1.5kmに位置する。両寺は指呼の間で、当然ながら互いによく見えたであろう。

加古川の支流・畠川（あずみがわ）沿いの左岸。日岡丘陵の北東縁に立地しており、南と西側の展望は効かない。加古川市教育委による確認調査と、県の道路工事に伴う発掘調査が行われた。現状は道路。

- ・『石守廃寺』兵庫県教育委員会 2008年
- ・兵庫県立考古博物館HP「現地説明会資料」

寺域は、「南側の段丘から続く部分のみ柵により区画し、残る三方は1m程度の自然の段丘崖が区画の代用とされたか」とある。西条廃寺では回廊がなく木柵（板塀）であったが、さらに簡略化されている。南辺の柵列には途切れる箇所があり、中門と推定されるが、門の施設は確認されていない。推定東門跡も残りはよくなくはっきりしない。

伽藍配置は法隆寺式の範疇になる。瓦積化粧の金堂基壇跡（東西約14m×南北約11m）は削平されているようで小振りである。講堂跡は明確でなく、削平された可能性が高い。講堂北側に僧坊跡（9間×4間）が確認され、僧の居住が明らかになった。鍛冶工房、炊事施設も併設されている。

寺院の東側には溝で区画され、瓦も使った建物が建てられており、特別な施設かと推測されている。関連するかどうか、百済王氏の建立した百済寺跡（枚方市）でも寺域東南隅に築地により区画され、基壇をもつ特別な建物がみられる（「現地説明会資料」枚方市教育委員会 2010.2.21）。寺域に重なって集落が存在していたのも興味深い。

遺物には、風鐸、水煙等も。塔心礎が近所の宝塔寺境内に移されているのだが、見損なった。

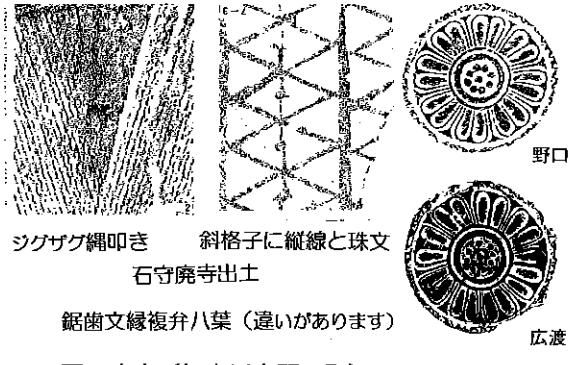
瓦の系譜

軒瓦は軒丸瓦6種、軒平瓦4種。創建瓦は輻線文帯（ふくせんもんたい）細弁十六葉蓮華文。野口廃寺の鋸歯文縁複弁八葉蓮華文の系譜とされる。

軒平瓦のうち、波状文を型押しする軒平瓦は主として塔跡、斜格子文は金堂跡から出土したらしい。金堂、塔を建てた知識集団が異なったことが考えられる。忍冬唐草文軒平瓦は2種あるが、いずれも西条廃寺と同様。こちらは上宮王家と関連を持っていた山直（やまのあたい）、馬養造（765年、印南野臣に）が壇越・知識であったとも推測される。

平瓦には特徴的なものが見られる。河内の渡来系寺院と関連するジグザグ縞叩きのものがあり、広渡廃寺・新部大寺廃寺・繁昌廃寺（全て賀毛郡）と共に通する。また、斜格子のタタキを施し、珠文をおくものは、西条廃寺、溝之口遺跡（賀古郡家？）に出土例があり、郡司級の有力集団が石守廃寺・西条廃寺の知識に関わっていたものと思われる。

石守廃寺の創建年代は7世紀末で、9世紀中頃まで存続したと推定されている。



鋸歯文縁複弁八葉（違いがあります）

石守廃寺出土

野口廃寺（加古川市野口町）

野口

廣渡

野口廃寺は石守廃寺から南西へ2km強、加古川東ランプから西へ2km弱。JR神戸線と国道2号線に挟まれた野口神社の境内になる。すぐ西に沙弥教信（きょうしん）由縁の広い敷地をもつ教信寺がある。南400mには山陽道最大規模の駅家、賀古駅家跡・古大内（ふるおうち）遺跡が残る。

社地の周囲には濠が残る個所もあり、かつて略方形をなした東西約109m、南北145mの一郭が廃寺跡かと推測されている。社殿背後は社叢になっており遺構が残るが、柵があり入れない。

・『野口廃寺 発掘調査概要報告書』

加古川市教育委員会 2004年

・西川英樹「野口廃寺出土瓦に関する若干の考察」

『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁葭子
先生喜寿記念論文集刊行会 2009年

発掘調査により、講堂跡（東西約24m×南北約15m）、塔跡（一辺10.2m）、講堂跡西北に小堂宇跡（東西約8.2m×南北約6.6m）などが確認された。すべて瓦積化粧基壇。他に、北東建物と称せられる掘立柱建物が検出された。金堂跡は未確認。

瓦の系譜

軒丸瓦4種、軒平瓦5種。播磨国府系瓦が数種。鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦が、塔・講堂・小堂宇跡から出土しており創建瓦である。この瓦当の文様は広渡廃寺（小野市）でも見られるが、広渡廃寺のものは割付けに狂いがあり、一ヶ所（一葉）が三弁になっている。つまり、瓦芯を模倣する際にミスしたもので、広渡廃寺のものが後出する。

丹波市丹南町の井原遺跡群出土例とは同様であり、他にも、平瓦凸面に放射状のような叩き目を残すものも共通の技法と指摘されている。

法隆寺式軒平瓦は、繁昌廃寺・吸谷廃寺（賀毛郡）と比較し、文様がかなり形骸化する。

中西廃寺（加古川市西神吉町中西）

加古川右岸（西岸）に立地しており、律令制下の印南郡になる。神吉（かんぎ）という地名は、「風土記」の含芸里（かむきのさと）の遺称とされ、私部（きさきべ）弓束等の居住地である。大国里の大國も西神吉町大國に残る。大國という名称は、多くの家があつたので名付けられたとある。石作連の居住地。

廃寺跡は、加古川バイパス加古川ランプから北へ約1km。JR神戸線宝殿（ほうでん）駅の北2km弱。野口廃寺から西北に6km強になる。

薬師堂が目標で、県道387号線沿いの宝殿キリスト教会脇の小道を北に入る。中西廃寺といえば必見の、塔の石造露盤（ろはん）と円筒状の刹（さつ）が「石井の清水」に残る。これがまた探すのが難物だが、県道の南側の坂を下り、崖に沿って西に歩くとあり、湧き出し口に使われている。周辺には駐車できる空地がなく、近所の量販店で何か買ひ、客用駐車場を利用するしかない。

小さな観音堂の境内には長径2mを超す巨大な塔心礎が残り、柱孔の周囲には環状の溝がめぐらされている。境内には礎石と思われる石も残る。

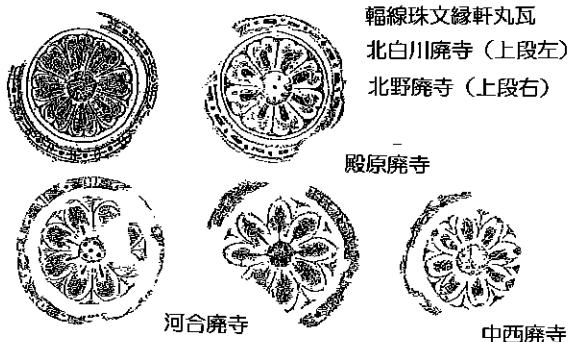
発掘調査はされておらず、寺域や伽藍配置は不明。創建瓦は外縁に珠文と3本の輻線文（ふくせんもん）とを相互に配する、極めて特徴的な単弁八葉蓮華文軒丸瓦と、これも珍しい顎部（あごぶ 瓦裏側の先端部分）に5条の平行突線文を2帯（2ヶ所）施した五重弧文の軒平瓦とされる。

寺院の存続年代は、続播磨国府系瓦と呼称される平安時代中期まで下る軒丸瓦も採集されていることから、7世紀末～11世紀とされる。長期間にわたりて存続した地域の中心的な寺院のようだ。

瓦の系譜 輻線（ふくせん）珠文縁について 秦氏・古代山陰道関連か

輻線珠文縁とは、軒丸瓦の外区（外縁）に、珠点、矩形、直線などを交互に配したものといい、系譜は、但馬、丹波、山背につながる（前岡孝彰「但馬の古代寺院とその軒瓦」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』2007年。他）。

この特徴的な文様を最初に採用した寺院は、山背・北白川廃寺とされ、珠文と「キ」字状の文様を交互に配している。次いで、珠文と矩形を交互に配した山背・白川廃寺例がみられる。両廃寺は京都盆地北辺の秦氏の本拠地に立地し、秦氏に関連する。



但馬では、殿岡廃寺（美方郡香美町村岡）例が最も北白川廃寺例に近く、立脇（たちわき）廃寺・釣坂遺跡（朝来市立脇）例が白川廃寺に似るようだ。三宅廃寺（豊岡市三宅）例は在地化が目立つ。

殿岡廃寺周辺には石室石片にハス（蓮華）の絵を描いていた長者ヶ平2号墳があり、また、三宅廃寺の知識集団は秦氏集団と考えられる。

播磨において輻線珠文で飾る瓦当（がとう）は中西廃寺以外に、河合廃寺（小野市）、殿原廃寺（加西市）で出土している。文様は但馬より後出するとされ、山背→但馬→播磨・丹波と文様が伝わったと考えられている。加古川流域の寺院造立知識集団のネットワークは広範囲に形成されていたようだ。

山陽道古代バイパス 賀茂郡伝路（でんろ）

古代寺院の立地については、古代道路と密接に関連することが明らかになっている。7世紀後半、列島に突然出現した両者は見せる要素が強い。

石守廃寺・中西廃寺は、山陽道古代バイパス沿いに建立されたとの指摘があり（吉本昌弘「播磨国邑美・佐空駅家間の山陽道古代バイパス」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』1990年）、西条廃寺はバイパスと加古川を見下ろす位置に、野口廃寺は賀古駅家と向かい合って建立されている。

また、広渡廃寺は賀茂郡の伝路に沿うとの指摘もある（吉本昌弘「古代播磨国賀茂郡の伝路について」『喜谷美宣先生古稀記念論集』2006年）。

山角（やまかど）廃寺（加古川市平荘町山角）

加古川下流屈折点の右岸、平荘小学校校庭に塔心礎が残るが、出土遺物は丸瓦・平瓦が各1点に過ぎず詳細不明。周辺には中世以来の古文書、石造物をもつ報恩寺があり、広渡廃寺と浄土寺を想起させる。